

栄養教諭制度の施行に伴う教育活動記録－Ⅳ

－栄養士養成課程在学中における短期大学生の

栄養教諭に対する意識の変化－

大富あき子*, 大内山雅枝**, 花木 秀子*

Educational activity corresponding to enforcement of
the nutrition teacher's system – IV

Change in awareness of nutrition teacher during the period
spent at college for dietitian course students

Akiko Otomi*, Masae Ouchiyama**, Hideko Hanaki*

全国的にも栄養教諭を活用していこうという気運は高く、栄養教諭を中心とした食育が今後ますます盛んになることが期待されている。

そうした中で、平成17年に入学して栄養教諭に関連する科目を履修し、平成18年には栄養教育実習を経験した栄養教諭免許取得の第1期生と、翌年入学の第2期生を対象に、栄養士と栄養教諭に対する意識の経時変化をみる目的で、入学時、入学1年後、2年次前期の栄養教育実習終了後に、アンケート調査を実施し比較検討した。

その結果、多くの学生は入学時には栄養教諭免許についての知識は希薄な状態であったが、将来性に期待して免許取得を希望して授業を履修し、栄養教育実習に臨んでいた。履修を決める際には「授業にきちんとついていけるか」、「児童生徒や指導教諭らとコミュニケーションをうまくとれるか」などの不安があったものの、実際に実習を行った後には、「楽しかった」、「コミュニケーションがうまくいった」、「指導教諭とよい関係だった」などの意見が多数あげられていた。短大における食育関連の授業は高校までと比較して「内容が充実していた」が、さらに、「模擬授業を増やす」、「指導案の書き方をさらに詳しくする」などが今後の課題とされた。学生自身の改善点としては、「知識を増やす」、「気配りができる」、「人前でもあがらない」、「コミュニケーションをうまくとる」などがあげられた。

本研究から、栄養教諭免許取得に向けた本学の事前学習や小・中学校現場における実習は、学生自身を養成する上で非常に有益であることが示唆された。

Key words: [栄養教諭] [食育] [教育実習] [アンケート]

(Received September 18, 2007)

* 鹿児島純心女子短期大学生活学科食物栄養専攻 (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

** 鹿児島純心女子短期大学非常勤講師 (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

I. 緒 言

平成17年度より栄養教諭制度が創設されたのをうけ¹⁾、著者らは第1報²⁾、第2報³⁾、第3報⁴⁾において、栄養教諭制度の施行に伴う教育活動について報告してきた。第1報では、栄養教育実習開講までの準備から実際の実習までの活動および栄養教諭免許取得の第1期生である平成17年度入学生の入学時における栄養教諭についての意識について報告した。入学前から栄養教諭制度を知っていた学生は、16.6%に過ぎず、本学食物栄養専攻の受験動機に栄養教諭免許が取得できるからと考えていた学生は6.7%のみであったが、入学後に栄養教諭免許状の取得を希望した学生は87.5%にのぼった。短大入学後の履修ガイダンスで、本学教員による説明を聞き、免許取得を希望したものと推察される。

本報では、栄養教諭免許取得の第1期生と、平成19年度に栄養教諭免許状の取得に向けて関連科目を履修した第2期生を対象に、栄養士および栄養教諭に対する在学中の意識変化をみる目的で、入学時、入学1年後、2年次前期の栄養教育実習終了後にアンケート調査を実施し比較検討した。

その結果、若干の知見が得られたので以下に報告する。

II. 方 法

本学食物栄養専攻に栄養教諭免許状取得可能な第1期生として平成17年度に入学した学生48名、および平成18年度に入学した第2期生48名を対象として、集合調査法によるアンケート調査を行った。

調査時期は、1回目が入学直後で、2回目が入学して1年後の1年後期授業終了時、3回目が2年次5月末～6月初旬に実施した学校給食管理実習1週間・栄養教育実習1週間の終了後である。

集計はSPSS12.0を用いて、単純集計、クロス集計を行い、 χ^2 検定で有意差の検討を行った。⁵⁾ アンケートの内容については、以下に示す通りである。

【1回目：入学時】

栄養教諭に関する意識調査（入学時）

S1A（ ）番 名前 _____

「栄養士および栄養教諭」について、入学直後に感じていた貴女の率直な意見を記入してください。なお、これは栄養教諭関連の授業に、今後役立てることを目的としたアンケートであり、個人名は外に出ません。また、この結果が今後の成績等に影響することは一切ありませんので、正直に回答してください。

■ 当てはまるところに○をつけるか、（ ）内に記述で回答してください。

問1. 本学に入学する前に、栄養教諭制度を知っていましたか？

1. はい 2. いいえ 3. その他（ ）

問2. 栄養教諭免許取得を選択した学生に聞きます。選択をした理由は何ですか。（複数可）

1. 国家資格だから
2. 学校栄養士になりたいから
3. 持っていれば学校栄養士以外の就職にも有利と思うから
4. 将来、役立つかもしれないから
5. 栄養教諭にはならないが、ただ勉強したいから
6. ただ何となく
7. その他（ ）

問3. 栄養教諭免許取得を選択しなかった学生に聞きます。選択しなかった理由は何ですか。

※ 選択しなかった理由（ ）

※ 入学後、取得すればよかったと感じることがありましたか。

1. あった 2. なかった

問4. 本学の食物栄養専攻を受験した動機に、「栄養教諭免許が取得できるから」がありましたか。

1. あった 2. なかった

問5. 栄養教諭制度を何で知りましたか。（複数可）

1. 高校の先生から聞いた

※その先生は誰ですか（進路指導担当・担任・他の教科（ ））

2. 新聞・雑誌やテレビ等のマスメディアで知った

3. 家族・親戚から聞いた

4. 友人・知人から聞いた

5. その他（ ）

問6. 入学時の現在、将来はどのような分野の栄養士として働きたいと考えていますか。

1. 病院 2. 学校 3. 保育園 4. 福祉施設 5. 寄宿舎

6. 食品会社 7. パティシエ 8. その他の栄養士（ ）

9. 栄養士以外の仕事（ ）

【2回目：入学1年後】

栄養教諭に関する意識調査 (1年後)

S1A () 番 名前 _____

「栄養士および栄養教諭」について、1年間勉強してきて、感じたこと等、貴女の率直な意見を記入してください。なお、これは栄養教諭関連の授業に、今後役立てることを目的としたアンケートであり、個人名は外に出ません。また、この結果が今後の成績等に影響することは一切ありませんので、正直に回答してください。

■ 当てはまるところに○をつけるか、() 内に記述で回答してください。

問1. 現時点において、食育はしていかなければならないと感じていますか？

1. 感じている 2. 感じていない 3. その他 ()

※「1. 感じている」と回答した人、それは、どんな場所(例：学校など)で必要と思いますか。()

問2. 栄養教諭制度は必要であると感じていますか？

1. 感じている 2. 感じていない 3. その他 ()

問3. 入学後1年経った現時点では、将来はどのような分野の栄養士として働きたいと考えていますか。

1. 病院 2. 学校 3. 保育園 4. 福祉施設 5. 寄宿舍
6. 食品会社 7. パティシエ 8. その他の栄養士 ()
9. 栄養士以外の仕事 ()

【以下は、栄養教諭の免許取得者のみ回答してください。】

問4. 栄養教諭に関する授業を1年間受講して、貴女のためになったと思いますか。

1. なった 2. ならなかった 3. その他 ()

問5. 自分の小・中学校時代に受けた食育と、食物栄養専攻で栄養教諭の卵として1年間受けた食育授業との間には、内容的に相違点がありましたか。

1. あった 2. なかった 3. その他 ()

※「1. あった」と回答した人は、それは、どのような点でしたか。

相違点 ()

問6. 栄養教諭に関する授業を1年間受けた結果、興味・関心が持てましたか。

1. 持てた 2. 持てなかった 3. その他 ()

問7. 栄養教育実習に出るにあたって、不安がありますか。

1. ある 2. ない

※「1. ある」と回答した人、それは、どのようなことですか。

不安なことがら ()

【3回目：栄養教育実習後】

栄養教諭に関する意識調査（栄養教育実習後）

S2A（ ）番 名前 _____

「栄養士および栄養教諭」について、栄養教育実習を終えて、感じたこと等、貴女の率直な意見を記入してください。なお、これは栄養教諭関連の授業に、今後役立てることを目的としたアンケートであり、個人名は外に出ません。また、この結果が今後の成績等に影響することは一切ありませんので、正直に回答してください。

■ 当てはまるところに○をつけるか、（ ）内に記述で回答してください。

問1. 栄養教育実習先は、次のどれですか。

1. 出身小学校 2. 出身外小学校 3. 出身中学校 4. 出身外中学校

問2. 栄養教育実習を通して、感じたことは何ですか。（複数可）

1. 楽しかった 2. 楽しくなかった 3. 大変だった 4. 楽だった 5. 忙しかった
 6. 忙しくなかった 7. 児童・生徒とのコミュニケーションが難しかった
 8. 児童・生徒とコミュニケーションがうまくいった
 9. 指導教諭との関係がよくなかった 10. 指導教諭とよい関係だった
 11. その他（ ）

問3. 短大で習得したことと、実際の学校現場における食育実習では、相違点がありましたか。

1. あった 2. なかった

※「1. あった」と回答した人、それは、どのような点でしたか。

相違点（ ）

問4. 栄養教育実習を通して、今後、貴女が努力していかなければならないと感じたこと、改善すべきと感じたことは何ですか。

1. 自分の性格・・・どのような性格をどのように（ ）
 2. 人前であがらないようになること 3. 知識 4. 敬語の使い方
 5. 気づき・気配り 6. 他人とのコミュニケーションのとり方
 7. 何もない 8. その他（ ）

問5. 短大で今まで受けた授業の中で、新たに取り入れて欲しいことがあったら書いてください。
 （ ）

問6. 実習を終えた現在、将来はどういう分野の栄養士として働きたいと考えていますか。

1. 病院 2. 学校 3. 保育園 4. 福祉施設 5. 寄宿舎
 6. 食品会社 7. パティシエ 8. その他の栄養士（ ）
 9. 栄養士以外の仕事（ ）

Ⅲ. 結果および考察

(1) 入学時の栄養教諭に対する意識について

平成17年度入学生の入学時のアンケート結果については第1報と重複するが、平成18年度入学生との比較検討のため再掲した。

1) 栄養教諭制度の入学前認知度

「問1. 本学に入学する前に、栄養教諭制度を知っていましたか?」という設問に対する回答結果を図1に示す。

これより、平成17年度入学生で認識していた者は、わずかに16.7%だが、制度創設2年目の平成18年度入学生は56.3%と有意に増加していた。しかし、依然として知らなかった学生が43.8%存在したことより、高校生に対する栄養教諭制度の認知度を上げていく必要性を感じる。

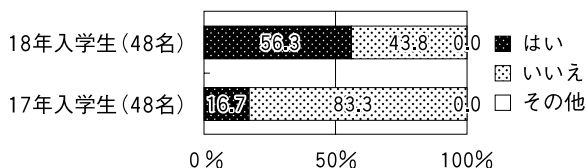


図1 栄養教諭制度を知っていたか

有意差あり (χ^2 検定, $p=0.000$)

大橋⁶⁾によると、平成17年4月に実施した短期大学生対象の調査において、栄養教諭について認知した時期は約半数が高校3年次であり、約半数は入学後である。入学前の認知の方法としては、「高校教諭から」、「進路に関する情報から」、「短大の進学説明会において」という意見が多く、早い時期に栄養教諭についての説明を受ける機会があった。情報にふれる機会の相違が、本学学生との認知度の差となって現れたものと思われる。

2) 栄養教諭免許取得の選択理由

「問2. 栄養教諭免許取得を選択した学生に聞きます。選択をした理由は何ですか。」との設問に対する回答結果を表1に示す。

有意差は認められなかったので (χ^2 検定, $p=0.839$)、入学年度による相違はないといえる。選択理由として多かった回答は、「将来役立つかもしれないから」、「持っていれば学校栄養士以外の就職にも有利と思うから」という、入学直後にはまだ実感のない卒業後の将来に期待をかけての免許取得の選択であることがわかる。竹森⁷⁾は、食育は学校現場においてのみ必要というわけではなく、患者の若年化により医療現場においても必要、さらには食育の原点は家庭の食卓にあるので母親も食に関する知識が必要であると述べている。「食と健康」のエキスパートである栄養士となる短期大学の学生が、栄養教諭免許取得に向けた勉強を通して知識を増やすことは、仮に栄養教諭として就業しなくとも非常に有意義なことと思われる。

表1. 栄養教諭免許取得を選択した理由（複数回答可）（人数）

	17年入学生	18年入学生
国家資格だから	6	11
学校栄養士になりたいから	7	11
持っていれば学校栄養士以外の就職にも有利と思うから	20	28
将来、役立つかもしれないから	31	36
栄養教諭にはならないが、勉強がしたいから	1	3
何となく	1	3
その他	0	1
合計	66	93

有意差なし（ χ^2 検定, $p=0.839$ ）

3) 栄養教諭免許取得を選択しなかった理由

「問3 栄養教諭免許取得を選択しなかった学生に聞きます。選択しなかった理由は何ですか。」「入学後、取得すればよかったと感じることがありましたか。」の設問に対する回答結果を表2に示す。入学直後に選択しなかった学生は、平成17年度入学生では6名、平成18年度入学生が0名である。

なお、平成17年度入学生の場合は、栄養教諭2種免許状もしくは本学認定の医療秘書士・医療事務管理士の資格を取得できたため、栄養教諭免許状を取得しない学生は上記の2資格を取得した。

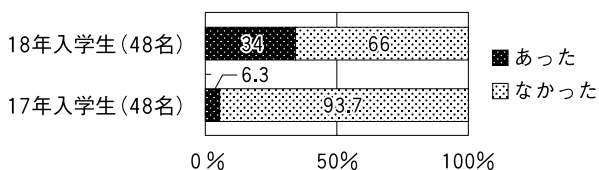
しかし、平成18年度以降は、上記2資格は本専攻学生の取得資格から割愛している。

表2. 選択しなかった理由（自由記述）、および取得しなかったことに対する意見（人数）

回 答 内 容	17年入学生（6名）	18年入学生（0名）
興味がない	3	0
大変そうだったから	1	0
先生にはなりたくない	1	0
医療事務系の資格が欲しい	1	0
取得すればよかったか	そう思う	0
	そうは思わない	0

4) 「本学の受験動機に、栄養教諭免許取得が可能である」があったか

「問4. 本学の食物栄養専攻を受験した動機に、「栄養教諭免許が取得できるから」がありましたか。」の設問についての回答結果を図2に示す。



平成17年入学生はわずか6.3%であったが、次年度入学生は34%と有意に増加した (p=0.000)。

図2 栄養教諭免許取得が受験動機にあったか
有意差あり (χ^2 検定, p=0.000)

このことより、入学生の募集には、食育や栄養教諭制度の重要性をアピールしていくことが、有益かつ必要であると思われる。

5) 栄養教諭制度の情報源

「問5. 栄養教諭制度を何で知りましたか。」の設問に対する回答を表3に示す。

学年間における有意差は認められない (p=0.244)。いずれも最も多かった回答は、入学時のガイダンスにおいて本学教員より聞いたという回答であった。しかし、平成18年度入学生はキャンパス見学会や短大配布のパンフレットでも情報を得ていることから、これらの情報を活用して栄養教諭制度についても発信していくことは重要である。

なお、初年度は、本県の栄養教諭雇用が69名と多数であったことから、トピックとして新聞等のマスメディアを通して広く流布されたが、最近では、掲載回数が低下している。

表3. 栄養教諭を知った情報源 (人数)

	17年入学生	18年入学生
高校の先生から聞いた (合計)	2	3
担任	2	1
家庭科教諭	0	1
未記入	0	1
新聞・雑誌やテレビ等のマスメディアで知った	9	9
家族・親戚から聞いた	4	9
友人・知人から聞いた	2	3
その他 (合計)	33	30
短大の先生から	31	21
キャンパス見学会	1	4
高校訪問に来た短大の先生から	1	1
短大のパンフレット	0	4
高校時の学校説明会	0	1
他短大の説明会	0	1
インターネット	0	1

有意差なし (χ^2 検定, p=0.244)

6) 入学時における将来の就職希望

「問6. 入学時の現在、将来はどのような分野の栄養士として働きたいと考えていましたか。」の設問に対する回答結果を表4に示す。

学年間における有意差は認められない(p=0.150)。ほとんどの学生が栄養士就業希望であり、特に、病院と保育園の栄養士就業希望が多かった。

表4. 入学時における将来の就職希望 (人数)

	17年入学生	18年入学生
病院	14	11
学校	6	4
保育園	15	14
福祉施設	6	1
寄宿舍	2	1
食品会社	2	6
パティシエ	2	6
その他の栄養士 (合計)	0	3
スポーツ栄養士	0	2
未記入	0	1
栄養士以外の仕事 (合計)	1	2
医療事務	1	0
非就職	0	1
料理の先生	0	1

有意差なし (χ^2 検定, p=0.150)

(2) 入学1年後における栄養教諭に関する意識の変化について

1) 入学1年後の食育に対する必要性の認識

「問1. 現時点において、食育はしていかなければならないと感じていますか?」の設問に「1. 感じている」と回答した学生の回答結果を図3および表5に示す。

学年間に有意な差は認められず、いずれも100%近くの学生が必要と感じていた。さらに、食育の必要な

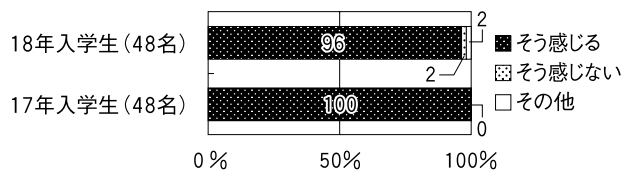


図3 1年後の現在食育は必要と感じるか

有意差なし (χ^2 検定, p=0.360)

場所としては、学校をあげる者が多く、次いで保育園が多い。1年間、栄養教諭免許取得の関連科目を履修する過程で、小・中学校はもとより、さらに低年齢である保育園児に対する食育の必要性を強く感じた結果と思われる。

表5. 食育の必要性を感じている回答者が考える食育が必要な場所 (自由記述, 人数)

	17年入学生 (全体48名)	18年入学生 (全体46名)
学校 (全般)	33	35
大学	0	1
高等学校	0	1
保育園	16	23
幼稚園	5	5
給食時間	0	1
福祉施設	0	1
家庭	6	5
地域	5	1
病院	4	2
産婦人科	2	1
保健所	0	1
テレビ番組	1	0
講習会	1	0
その他公共機関	0	1

2) 栄養教諭制度の必要性に対する認識

「問2. 栄養教諭制度は必要であると感じていますか？」の設問に対する回答結果を図4に示す。

これより、いずれの学年においても必要性を感じているが、特に、平成17年度入学生が有意に強く感じていた。(p=0.048)

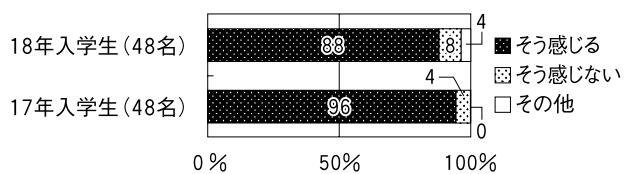


図4 栄養教諭制度は必要と感じるか
有意差あり (χ^2 検定, p=0.048)

3) 入学1年後における将来の就職希望

「問3. 入学1年後の現時点においては、将来はどのような分野の栄養士として働きたいと考えていましたか。」の設問に対する回答結果を表6に示す。

学年間の有意差は認められない (p=0.228)。いずれも、病院、保育園の栄養士就業希望が高いが、2期生においては、栄養士以外の仕事、食品会社、パティシエなど選択肢が広がっている。

なお、就職希望の経時変化については（４）において後述する。

表6. 入学1年後における将来の就職希望（人数）

	17年入学生	18年入学生
病院	11	11
学校	4	4
保育園	17	14
福祉施設	5	1
寄宿舍	1	1
食品会社	3	6
パティシエ	2	6
その他の栄養士	0	3
未回答	0	3
栄養士以外の仕事	5	9
家庭科教諭	1	0
動物看護師	0	1
事務職	1	1
販売職	0	1
調理師	0	1
今は未定	1	0
未回答	2	5

有意差なし（ χ^2 検定, $p=0.228$ ）

4) 自己に対する、栄養教諭関連授業の貢献度

以下は、平成17年度入学生42名、平成18年入学生39名の栄養教諭免許取得者のみの回答である。

「問4. 栄養教諭に関する授業を1年間受講して、貴女のためになったと思いますか。」の設問に対する回答結果を図5に示す。

いずれの年度も、ほぼ100%に近い学生が自分のためになったと回答している。

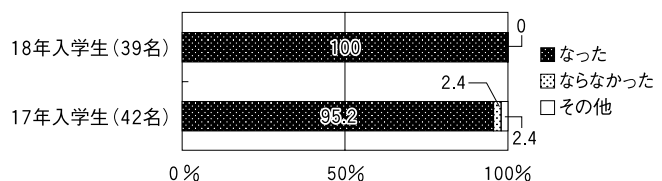


図5 栄養教諭の勉強は自分のためになったか

有意差なし（ χ^2 検定, $p=0.228$ ）

5) 小・中学校時の食育授業と本専攻における食育授業の相違

「問5. 自分の小・中学校時代に受けた食育と、食物栄養専攻で栄養教諭の卵として1年間受けた食育授業との間には、内容的に相違点がありましたか。」の設問に「1. あった」と回答した者の意見を図6、表7に示す。

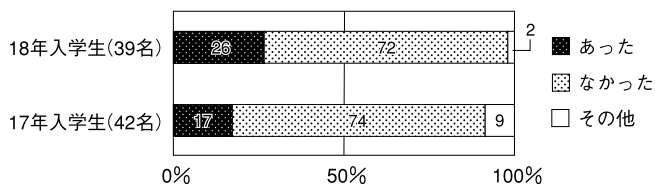


図6 小中学校で受けた食育と短大の食育の授業に相違点はあったか
有意差なし (χ^2 検定, $p=0.305$)

学年間の有意差は認めない ($p=0.305$) が、17% (17年入学生) もしくは26% (18年入学生) と若干の相違がみられ、相違点としては内容が詳しくなったことをあげている。

表7. 「相違があった」と回答した者の、小・中学校で受けた食育と短大における食育授業の相違点

	17年入学生 (全体7名)	18年入学生 (全体10名)
そもそも食育は受けていなかった	2	6
朝食の内容の指導法を詳しく受けた	0	2
アレルギーについての指導法を詳しく受けた	0	2
教える側のこと深く学べた	0	2
全般的に詳しい内容を受けた	2	0
自分の受講態度そのものが変わった	1	0

有意差なし (χ^2 検定, $p=0.305$)

6) 栄養教諭免許の取得関連授業に対する興味関心

「問6. 栄養教諭に関する授業を1年間受けた結果、興味・関心が持てましたか。」の設問に対する回答結果を図7に示す。

学年間に差異は認めず、いずれも100%近い学生が興味関心が持てたと回答している。

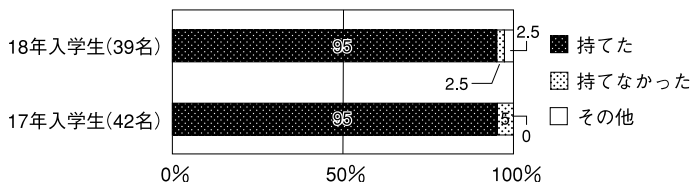


図7 栄養教諭の授業は興味関心が持てたか
有意差なし (χ^2 検定, $p=0.511$)

7) 栄養教育実習に対する不安感

「問7. 栄養教育実習に出るにあたって不安がありますか。」の設問に「1. ある」と回答した学生の回答結果を図8および表8に示す。

学年間に差異はなく、いずれも100%近い学生が不安を感じている。その不安内容は、表8

から評価授業の実施をあげている者が最も多く、次いで、コミュニケーションをとることや人前で話することなどをあげている。今後、あらゆる機会を活用し、数多く人前で話す訓練を行う必要があると思われる。

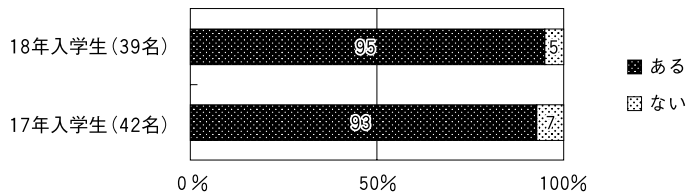


図8 栄養教育実習に不安があるか
有意差なし (χ^2 検定, $p=0.707$)

表8. 栄養教育実習を行うにあたって不安に感じていること (自由記述)

	17年入学生 (全体42名)	18年入学生 (全体39名)
評価授業がきちんとできるか	20	23
生徒とコミュニケーションがうまくとれるか	4	7
人前で話ができるか	9	1
しっかりと指導できるかどうか不安	0	2
実習すること全てが不安	2	2
答えられない質問をされたらどう対処するか	2	0
先生とのコミュニケーションがうまくとれるか	0	1
先生として児童に接することができるか	0	1
自信を持って実習ができるか	0	1
生徒の名前が覚えられるか	0	1
中学生は荒れてはいないか	0	1
その場になじめるかどうか	0	1
献立作成ができるか	0	1
どの教科で授業をするのか	1	0
指導案の作成	1	0
他の実習生とうまくやれるか	1	0
自分自身の身につけている力がどの程度か	1	0
実習前の今の時期には何の準備をすべきか	1	0
あがり症だが大丈夫か	1	0
媒体の作成	1	0

(3) 栄養教育実習後の栄養教諭に対する意識変化

以下の質問には、17年入学生42名、18年入学生37名が回答している。なお、18年入学生のうち、2名はアンケート調査実施時点で教育実習を終えていなかったため割愛した。

1) 栄養教育の実習先

「問1. 栄養教育実習先は、次のどれですか。」の設問に対する回答結果を図9に示す。

6割近くが出身の小学校で、3割近くが出身中学校である。

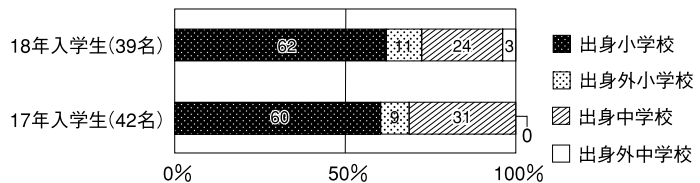


図9 栄養教育実習先

有意差なし (χ^2 検定, $p=0.682$)

2) 栄養教育実習後の感想

「問2. 栄養教育実習を通して、感じたことは何ですか。」の設問に対する回答結果を表9に示す。

いずれも「楽しかった」という意見が最も多くあげられ、教育実習が学生にとっては非常に貴重な経験となったことがわかる。学年間における有意差は認められていないが、「大変だった」、「忙しかった」、「児童・生徒とのコミュニケーションが難しかった」、「指導教諭との関係があまりよくなかった」、「指導教諭とよい関係だった」などの項目では、18年入学生が多かった。学校現場における実習受け入れが2年目ということで、その内容が充実してきた結果「大変」、「忙しい」という意見が増えたものと推察される。一方、コミュニケーション能力については、若者層の改善要件でもあることから、「人前で話す」ことも含め、大きな検討課題であると考えられる。

表9. 栄養教育実習を経験して感じたこと

	17年入学生	18年入学生
楽しかった	36	36
楽しくなかった	1	0
大変だった	15	27
楽だった	1	0
忙しかった	15	24
忙しくなかった	1	0
児童・生徒とのコミュニケーションが難しかった	11	18
児童・生徒とコミュニケーションがうまくいった	19	18
指導教諭との関係があまりよくなかった	2	17
指導教諭とよい関係だった	15	23
その他	1	4
児童たちと触れ合い愛着が出た	1	0
短かった	0	1
指導教諭が途中で出張、少し困った	0	1
課題の設定の書き方が、日本の現状・学校の現状・クラスの現状という流れだった	0	1
未記入	0	1

有意差なし (χ^2 検定, $p=0.068$)

3) 短大で習得したことで、実際の学校現場における教育実習の相違点

「問3. 短大で習得したことで、実際の学校現場における教育実習では、相違点がありましたか」の設問に「1. あった」と回答した者の回答結果を図10および表10に示す。

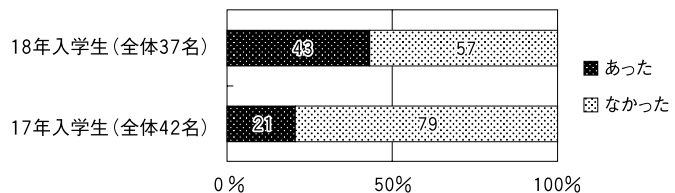


図10 短大で習得したことで学校現場との相違

有意差あり (χ^2 検定, $p=0.038$)

図10より、学年間において有意差を認めた ($p=0.038$)。18年入学生に相違点があったとの回答は多く、内容としては表10に示す通り、いずれも小・中学校の現場では短大で習った通りにはいかないという意見が多かった。これは、低学年になるほど集中力が続かないため、実習生自身が授業の進行過程において臨機応変な対応が出来なかったことによると推察される。

一方、思ったより学校現場で食育が実施されていないという意見もあげられた。これは、著者ら³⁾や、渡邊ら⁸⁾も報告しているが、従来、学校栄養士は給食管理業務に追われ、かつ食育の必要性を感じていても学校単位で管理者の理解が異なるなどの問題が多くその実施には学校

格差があること、まだ2年目で栄養教諭の活用が軌道にのっていないことなどから、そのように感じた学生がいたものと思われる。さらに、学生自身が栄養教諭創設に伴い、主要科目同様に食育が毎日授業として組まれていると誤認識したためと考える。

表10. 相違があったとの回答者の相違内容 (自由記述)

17 年 入 学 生	食物の栄養の赤黄緑などの言葉も聞いたことがない児童も多かった
	その場所の決まりごとややり方があった。衛生面が特に厳しかった
	授業は生徒の反応により臨機応変さが必要で指導案通りにもいかなかった
	なかなか食育は取り入れられていなかった。衛生面など知らなかったことがよい勉強になった
	短大で習ったことを実際の現場で実行するのは難しいことがあった
	栄養教諭がどのようなものかということが、学校にあまり知られていなかったので、担当の先生も苦労していた
	授業時間を使つての食育はなかなか難しかった
	栄養教諭の実習は初めてで、指導教諭が少し苦労していたようだ
	実際に生徒を相手にした時、どれくらいのことを理解できるのが難しかった
18 年 入 学 生	食育活動があまりされていなかった (4名)
	指導案の書き方 (3名)
	学活を想定した授業を練習していたが、実際は家庭科だったので少し違った
	自分が学ぶものが沢山あった
	児童と直接触れ合ってみたら思ったより素直で、授業も思ったよりやりやすかった
	人数が多く、思うように指導が出来なかった
	栄養教諭が1名で授業をすることがなくTT (チームティーチング) で行っていた
	児童の理解度が、想像と違った (2名)
教科書通りにはうまくいかなかった	

4) 栄養教育実習を終えて、今後の自己の努力点と改善点

「問4. 栄養教育実習を通して、今後、貴女が努力していかなければならないと感じたこと、改善すべきと感じたことは何ですか。」の設問に対する回答結果を表11に示す。

学年間で有意な差は認めず ($p=0.830$)、いずれの学年においても「人前であがらないようになること」、「知識」、「気づき・気配り」、「他人とのコミュニケーションのとり方」などが多かった。

表11. 栄養教育実習を通して感じた自分の今後の努力点, 改善点 (人数)

	17年入学生	18年入学生
自分の性格	9	7
もっと積極的に行動すること	4	3
早めに行動できるようにしたい	0	2
内向的な性格を外交的にしたい	1	1
場に応じた音量で話せるように	1	0
あがらずに人と接する	1	0
丁寧に物事をこなせるように	1	0
指示待ちではなく自ら行動できる	1	0
人前であがらないようになること	20	9
知識	27	20
敬語の使い方	7	3
気づき・気配り	27	11
他人とのコミュニケーションのとり方	16	8
何もない	0	0
その他	1	1
生徒の名前を覚える	1	0
未回答	0	1

有意差なし (χ^2 検定, $p=0.830$)

5) 短大教育の中で, 新たに取り入れて欲しい内容

「問5. 短大で今まで受けた授業の中で, 新たに取り入れて欲しいことがあったら書いてください。」の設問に対する回答結果を表12に示す。

記載事項および記述者も少なかったが, 前述されてきたような, 「模擬授業を増やす」や「コミュニケーション能力向上」, 「食育指導案の書き方の練習」などの意見があげられた。

なお, 食育指導案に関しては, 実習期間が1週間であることから主に略案を指導していたが, 本県の学校現場では細案で指導されていることが判ったため, 今後, 細案を教育していく予定である。

表12. 短大で今まで受けた授業の中で新たに取り入れて欲しいこと (自由記述, 人数)

	17年入学生	18年入学生
児童・生徒・先生らとのコミュニケーションの取り方	3	1
模擬授業を増やす	3	2
指導案の書き方を具体的に練習する	3	2
社会的なマナーや一般教養	1	0
先輩方の体験談を聞く機会が欲しい	1	0
指導案細案の書き方	0	4
媒体の書き方	0	2
献立作成の方法をもっと詳しく	0	1
栄養教諭の先生が実際に授業をしているところを見たい	0	1
表計算ソフトの表の貼り付け方を実習の前に知りたい	0	1

6) 将来の就職希望

「問6. 実習を終えて、将来はどのような分野の栄養士として働きたいと考えていますか。」の設問に対する回答結果を表13に示す。

前述同様、病院や保育園の栄養士としての就業希望が多く、学年間における差異はみられない ($p=0.466$)。

(4) 入学直後から栄養教育実習終了時までの、就職希望先の変化

入学時、入学1年後、栄養教育実習終了後の3時期における、就職希望先の変化を表14に示す。病院および保育園の栄養士としての就業希望が最も多く、次いで学校栄養士を希望する学生が多かったが、時期的な変化に有意差はみられない ($p=0.131$)。

表13. 実習を終えた時点での将来の就職希望先 (人数)

	17年入学生	18年入学生
病院	11	15
学校	4	6
保育園	13	8
福祉施設	3	1
寄宿舍	0	0
食品会社	3	0
パティシエ	1	1
その他の栄養士	1	2
委託会社栄養士	1	0
スポーツ栄養士	0	2
栄養士以外の仕事	6	4
動物介護士	1	0
自営業	1	0
美容部員	1	0
家庭科教諭	1	0
動物病院	1	0
一般事務職	1	0
未回答	0	4

有意差なし (χ^2 検定, $p=0.466$)

表14. 将来の就職希望の時期的な変化について（人数）

	17年入学生			18年入学生		
	入学後	1年後	教育実習後	入学後	1年後	教育実習後
病院	14	11	11	11	20	15
学校	6	4	4	4	3	6
保育園	15	17	13	14	8	8
福祉施設	6	5	3	1	2	1
寄宿舍	2	1	0	1	0	0
食品会社	2	3	3	6	4	0
パティシエ	2	2	1	6	2	1
その他の栄養士	0	0	1	3	1	2
栄養士以外	1	5	6	2	9	4

有意差なし（ χ^2 検定, $p=0.131$ ）

Ⅳ. おわりに

平成19年度現在で、栄養教諭2種免許状取得の関連科目を履修し、小・中学校の現場における栄養教育実習を体験した学生が2学年となった。養成校はじめ栄養教育実習受け入れ小・中学校にとっては、充実した内容の構築を模索する2年間でもあった。

そうした中で、実際に栄養教育実習を経験した学生に対して、栄養教諭制度に対する意識や、2年間の学習についてアンケート調査を行った。

その結果、学生らは栄養教諭についての知識はほとんどない状態で入学し、漠然と将来性に期待して免許取得を希望した様子が伺えた。そして「評価授業がきちんとできるか」、「小・中学生や指導教諭らとコミュニケーションがうまくとれるか」などの不安を感じながら学校現場で実習を行い、終了時には「楽しかった」、「コミュニケーションが上手くとれた」、「指導教諭とよい関係だった」などの感想が聞かれた。帰学後に、『「好き嫌いなく食べよう」という題材で授業を行ったところ、児童が「今まで食べなかったけれど、今日は全部食べたよ。」と給食の空になった食器を見せに来てくれた』と、目を潤ませて報告する学生は1名や2名ではない。本学学生の専門職に対する意識を確立する一助となっていることは明白で、心より感謝するところである。また、学生らが学校現場で実習することが、若年層における「生活習慣病の若年化」、「偏食」、「極端な痩身願望および肥満」、「欠食」などの改善に向け、少しでも貢献することにつながれば幸いである。

しかし、養成校としては、実習生を送り出すにあたり「実習期間が短い」ことや「指導案（細案）の書き方」、「知識を増やす」、「気づき・気配りができる」、「人前でもあがらない」、「コミュニケーション能力を高める」など多くの検討課題が残されている。

全国的にも栄養教諭を活用していこうという気運が高く、大木⁹⁾は管理職主導で学校をあげて栄養教諭を活用していくべきであり、栄養教育実習が「1単位」と短期であることから、最

大限活用するためには校長、教頭をはじめとする全校一体となった経営実践が不可欠であると述べている。石井¹⁰⁾も同様に、学校における食育推進について、学校が一丸となり地域社会との連携を持って行うべきと考察している。

一方、文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課¹¹⁾によると、全国の栄養教諭による活躍状況は特別非常勤制度時とは異なり様々な変化が見られると報告している。その中で、畑江¹²⁾は、生徒らの食生活の自立を目指した授業について提言し、渡辺¹³⁾は、保護者も学校の食育や給食に対して、単に栄養を摂取するだけではなく総合的な教育を期待していると報告している。このように、栄養教諭を中心とした食育が今後ますます盛んになることが様々な場面で期待されている。

本研究からも、学校現場での実習は学生の教育上非常に有益であることがわかった。さらに、山積している若年層を取り巻く食の問題解決など、今後の栄養教諭を中心とした食育推進への期待は大きい。養成校としても、栄養教諭や栄養士として食に関する意識の高い学生へと教育する使命を担っていることを改めて実感するところである。

最後になりましたが、学生の栄養教育実習、給食管理実習をお引き受けくださり有意義な実習をご指導いただきました各小学校、中学校、給食センターの諸先生方に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 文部科学省「文部科学白書(平成16年度)」:国立印刷局,東京,17(2005)
- 2) 大富あき子,青木五百子,大内山雅枝,花木秀子:栄養教諭制度の施行に伴う教育活動記録-I 栄養教育実習開講までの流れ,鹿児島純心女子短期大学紀要,37,55-67(2007)
- 3) 大富あき子,大見奈緒子,大内山雅枝,花木秀子:栄養教諭制度の施行に伴う教育活動記録-II 鹿児島県内小学校栄養士を対象とした栄養教諭制度に関する意識調査,鹿児島純心女子短期大学紀要,37,69-77(2007)
- 4) 大富あき子,大内山雅枝,花木秀子:栄養教諭制度の施行に伴う教育活動記録-III 鹿児島県における栄養教育実習担当教諭と小・中学生の食育に関する意識調査について,鹿児島純心女子短期大学紀要,38,(2008)印刷中
- 5) 内田治:「すぐわかるSPSSによるアンケートの調査・集計・解析」,東京図書,東京,134-141(2004)
- 6) 大橋伸次:栄養教諭志望者の意識について,国際学院埼玉短期大学紀要,27,127-130(2006)
- 7) 竹森美佐子:食育の実践現場より,食生活,10,26-32(2005)
- 8) 渡邊宏美,上田伸男:小学校教職員の食教育への認識,実践および課題,宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要,28,453-462(2005)
- 9) 大木光夫:栄養教諭制度を100%活用するための5つのポイント,いまこそ校長のリーダーシップを発揮するとき,教育ジャーナル,10,50-53(2005)
- 10) 石井克枝:学校における食育の現状と今後のあり方,中等教育資料,1,14-19(2006)
- 11) 文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課:全国での栄養教諭の活躍状況について,教育委員会月報,9,17-19(2006)

- 12) 畑江敬子, 田中京子: 学校における食育を推進するためのポイント, 中等教育資料, 1, 20-25 (2006)
- 13) 渡辺孝男, 桂田しづえ: 食教育における学校給食の有り方に関する研究, 宮城教育大学紀要, 37, (2002)

